

(..)φ メモメモ

どろどろに溶けた感情を、まるでタスクをこなすように形式的に分節化しようとする誘惑については、  
絶えず警戒し続けなければならない

その誘惑はどこからやってくるのか？  
それは例えば、文章を書く行為の中で生じる。

なにがしかの言葉を繰り出そうとする試みにおいては、言葉が感情を適切に捉えられないことがままある。  
それは別に不思議な事ではない。言葉には明らかな限界が存在するからだ。言語外で生じているあらゆる  
差異について、言葉はえてして無力である。

そうすると、言葉を繰り出そうとする試みは絶えず挫折の前に引きずり出される。  
書こうと決意したはずなのに、剔抉できると思っていたはずなのに、筆がピタリと止まる。言葉が出てこなくなる。

これは書こうとするものにとっては耐え難い苦痛である。  
確かにあるものが、ここまで来ているのに、出てこない。進まない。そんな日が何日も何日も続く。  
変転する思考を留めておくのには大変な体力が必要だ。何かを書こうとする意志だって、何日も書けない日が続くと  
流石に係留しきれなくなってくる。

誘惑にかられるのは、まさにその苦痛の最中である。

当初の信念を放り出してでも、何かを進めてしまいたい。生のままに抉り取らなくても、多少は妥協して、  
譲歩して、とにかく前に走り出したい。  
そんな欲求が参照するのは、これまで学んできたフレームワークである。  
課題解決の PDCA サイクルの中に、どろどろの感情は放り込まれ、成形され、原因が切り分けられ、  
無味乾燥な手触りのものとなる。

それに抗するためにマッチョになることにもまた、絶えず警戒し続けなければならない。「この感情を書ききるのだ！」と思い切ってしまうこと。譲歩をしないこと。それはそれで非常に危険である。ここから純化は始まっていくからだ。

どろどろの感情は割り切れないことから生じている。この感情を書こうとする上で自分自身が割り切ってしまうのは致命的である。例えそれが逆方向であっても。

割り切らないようにする中で、割り切らないという信念を、割り切りたいという欲求に常に曝しておくことが求められるのだ。割り切らない意志を実践するためには、これは逆説的なことだが、割り切るプロセスの中に絶えず身をさらすことが必要なのだ。自分自身が割り切らざるを得ないかもしれないということを経験することが重要だ。この認めがないならば、割り切らない行為は、大事な何かを取りこぼしたことになるだろう。

だから、割り切らないまま書こうとすること。渦中に止まり続けようとする。ジレンマの中で顔をしかめて、頭痛にさいなまれながら、筆を止め続けること。書くことと書かないことに引き裂かれそうになりながら、しみ出してくる何かに敏感になること。よく寝ること。ちゃんと食べること。悪態を吐くこと。割り切らないこと。泣くこと、息が浅くなること。唸ってみること。ううう、うおおう。うえう、あー。

どろどろの感情を見るということ、それと向き合うということは、凝視することではない。それはちらちらと見ることだ。何度もノックするということだ。消してリライトすることだ。恐る恐る触れていくことだ。

もし、その中でしみ出してくるなにもものがあるのならば、書こうとするものは、これをこの上なく大事なものであると同時に、限りなくどうでもいいものとして扱うことだろう。薄情なのだわたしは、ふふふ。

漸近したそれは、どうしようもなく、経験そのものではないわけだが、やはりプロセスそれ自体であり、それこそわたしが求めてやまないものなのであり、こいつのせいでわたしはなんとも呼吸の浅くなるクソみたいな日々を送る羽目になっているのである。

ああ、こいつは制御できないという確信があるのなら、あなたとわたしはどろどろをちらっと覗いたことになる。

傍目に見るくらいしかできないそいつについて、わたしたちはもっともっと、

慎重になるべきであり、大胆にもなるべきなのだ。

つまりはそれが倫理なのだろうと思う。

(終)